



(金 沢)

石川・金石本町遺跡

かないわほんまち

- 1 所在地 石川県金沢市金石本町
- 2 調査期間 第五次調査 一九九三年(平5) 九月～十二月
- 3 発掘機関 金沢市教育委員会
- 4 調査担当者 小西昌志
- 5 遺跡の種類 自然流路
- 6 遺跡の年代 弥生時代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、日本海まで約1km、犀川河口右岸に分布している。これまでに古代に属する遺物として、木簡四点、墨書土器一〇〇点以上が出土し、掘立柱建物群・倉庫群が確認されたことから「郡津」関連遺跡とされている(本誌第一九・二〇号)。

今回報告する近世・近代の木簡が出土した遺構SD〇四と、SD〇六は、いずれも自然河川の旧河道である。

SD〇四は犀川の旧河道である。川砂の堆積層で、調査区内では川幅、深さともに確認できていない。出土土器・陶磁器は、古墳時代前期から近世まで混在しており、犀川の蛇行により古代以前の遺跡分布範囲を浸食している。近世の陶磁器は、唐津系の陶器、肥前系の磁器、中国製磁器などがあり、中国製のものは、景德鎮系の染付、漳州窯系の染付碗、漳州窯系の色絵鉢で見込みに赤で「魁」の字を描くいわゆる「魁手」と呼ばれるものなどが出土している。陶磁器の時期はいずれも一七世紀に収まるものであり、陶磁器以外に燻し瓦も出土している。

犀川の河道は、寛永一十六年(一六三九)に切り替えられ、その後、旧河道は明暦二年(一六五六)から寛政五年(一七九三)までの間に順次水田となった。加賀藩前田家は、藩祖利家が本遺跡周辺の宮腰湊から金沢城に入城していることから、本遺跡の南東に隣接する大野湊神社を積極的に保護しており、犀川の蛇行により社地が浸食されたため、下流域の切り替えが行なわれたのである。他にも慶長九年(一六〇四)の二代藩主利長による大野湊神社の修理、寛永一十六年の三代藩主利常による本殿造営、貞享二年(一六八五)の五代綱紀による拝殿造営などが行なわれている。一七世紀に大野湊神社の整備が集中して行なわれ、中国製磁器を含む陶磁器や木簡は、この整備に伴う遺物と考えられる。

SD〇六は木引川の蛇行部分が一九五五年頃の河川改修で埋めら

れた旧河道で、SDO四を切っていることから犀川の切り替え以降の河川跡で、主に近世から近代の遺物が少量確認されている。

8 木簡の釈文・内容

SDO四



・「丈数」

壹丈六尺五寸

四分

193×(57)×7 065

SDO六

(2) 「私」

(72)×98×10 061

(3) 「昭和十九年六月
亭 守」

101×47×41 061

(1)は、何らかの板材を転用したものである。文字の配置から上下端は墨書後の欠損はないが、左右は欠損している可能性が高い。表面は判読不明、裏面はある物の長さを示している。ある物は表面に書かれた物なのか、裏面の右側欠損部に書かれていた物が確定できない。(2)は桶の把手を付ける部分、側板の長い部分のホゾ穴より上

で切断したと考えられる板に墨書がある。文字の下端の状態から、墨書後に切断されたものと考えられる。(3)は人形の背に面取りし墨書している。年月の後の「亭 守」の意は明確ではないが、御守りの人形の可能性もある。

9 関係文献

金沢市教育委員会『金石本町遺跡Ⅰ』（一九九六年）

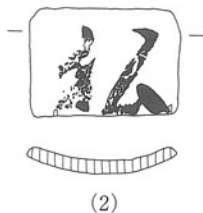
金沢市『金沢市史』資料編一九 考古（一九九九年）（小西昌志）



(3)



(1)



(2)